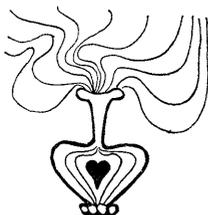


## 自然の色彩と子ども



岡本多加子

私たちの幼い日の記憶の中には、美しい自然にかこまれて遊んだ郷愁があります。

澄んだ青い空、緑、黄、茶、灰色など、さまざまな色が織りなした裏山、土の道、そこでみつけた真赤な木の実、こうした中を駆けまわって終日時を忘れて過しました。

現代、ビルの一室で仕事をし、喧噪とした街の中で生活している大人達は、休日には自然を求めて出かけます。広々とした草原や、紅葉した樹々に心がなごむことでしょう。大人にとって自然界はやすらぎです。しかし、子どもはどうでしょう。子どもにとって、自然界は決してやすらぎではなく、創造の源です。名もない雑草や雑木林からも感動が生まれ、新しい世界の発見があります。最近の子どもは、絵本の中でしか自然の美しさを知ることが少ないことは本当に残念なことです。

私の園の周囲は、まだまだ自然が残っている地方です。門の前に樹齢百年に近い大

きいちょうの木があり、秋にはみごとな黄色い葉が私達の眼を楽ませてくれます。やがて、そのいちょうの葉は砂場いっぱいに敷きつめられ、「お砂場は黄色になっちゃった」と、子ども達は拾っても拾っても手にいっぱい黄色い葉を集めます。

春、新しい芽が吹く頃、「先生、いちょうの葉っぱはうすみどり色だね」昔、私達は萌黄色と言いました。草木が萌える、木の芽が生まれる、さまざまな躍動が感じられます。その萌黄色のいちょうの木の下の、入園もない子ども達がにぎやかにかける姿はまさに躍動です。

松葉でうすも色のさくらの花びらを刺している年長児が、小さい組の子どもに、「どうぞ」とプレセント、恥ずかしそうに「ありがとう」という年少児、可愛い出会いです。いつの間にか、園庭の隅ではままごが始まっています。器に盛った砂に、野のすみれと緑の小さい葉がきれいな

コントラストを描いています。

「先生、見て、まぜごはんみたいでしょ」「まあ、おもしろね、いただきます」

子ども達は得意になって、まぜごはんつくりで夢中です。砂に盛られる草花は、摘んできた野の花でつぎつぎ色どられていきま

す。  
幼稚園から散歩に行く大きな公園、そこでは、一年中美しい自然が展開され、みんなこの公園を友達のように愛しています。

#### みどりの公園

大きな庭でびっくり

みどり色ばかりでびっくり

ころころ何遍も

ころがったけれどみどり色

草のにおいが、ぼくの体にくっついた

いいにおいだった

葉っぱの中の虫が

「苦しい」って、言ったみたい

ちようちよが心配そうにのぞきにくた

走っても、走っても

まだまだみどり色だった

これは、入園まもない三歳児が初めて公園に行きつぶやいたことばから、私が詩にしたものです。芝生の上に靴を脱いで坐ると、「わあ、つるつるしている、いい気持ち」と、大さわぎ、草の間を縫って、しろ

つめ草を探したり、クローバーやたんぽぽを摘みます。草すもうをしたり、花かんざしをつくって遊びます。

子ども達は、大人よりずっと早く自然の変化に気づきます。園庭のもみじが紅葉した頃、赤いもみじに茶や、黄色がまじっている葉を拾って、「このもみじは、おしゃれさんね」と情緒ゆたかな表現をします。

ベンチの上に、そうした赤や黄、茶色の葉を並べて自然のうちに美的感覚や調和、配色のすばらしさを感じとっていきます。大

きなやつでの葉の奥で、赤やだいたい色の実がいっぱいついているのをいち早く見つけるのも、カサカサした土の中から、小さい緑の芽を探し出すのも子どもです。緑の葉にくっついていてる青虫を見て、「おんなじ色にくっついていておかしいね」と不思議がります。

自然の中の色彩は本当に美しい色です。人間がつくりだす色には限りがありますが、自然の色彩には変化があり、無限の色がつくりだされます。

私は、こんなにすばらしい自然と子ども達のかかわりを残しておきたいいつも思っています。でも、どんなに高価な絵具でも画くことは不可能な気がします。それはあまりにも自然の色と子ども達とはびつたりすぎているからです。

(愛知・豊川幼稚園)